

平成 27 年度 法科大学院（法務研究科）入学試験

# 小論文問題紙

B日程

平成 26 年 10 月 25 日

10 : 00 ~ 12 : 00 (120 分)

(200 点)

## 注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、問題を開いてはいけない。
2. 小論文の問題紙は 1 ページから 8 ページである。
3. 解答用紙は、問題 1 問 1、問題 1 問 2、問題 2 問 1、問題 2 問 2 の 4 枚である。  
解答用紙の追加は認めない。
4. 解答用紙は 4 枚ともかならず提出すること。
5. 監督者の指示に従い、すべての解答用紙に受験番号と氏名を記入すること。
6. 解答はすべて解答用紙の指定された欄に記入すること。
7. 試験終了まで退室してはいけない。

北 海 学 園 大 学

**問題 1** 以下の文章は、チンパンジーの生態を長く研究してきた学者の文章の一部である。この文章を読んで、以下の設問に答えなさい（100点）。

### 再帰的な構造をもつ認識

実は、レベルといっても、これまでお話ししてきたレベルとは違うレベルが一つだけある。それは、自己埋め込み的な構造のレベルだ。別の言い方をすると、再帰的な構造というものがある。

その具体的な例は、「ことばに関することば」である。言語を記述する言語。例えば、形容詞とか名詞などの品詞がある。これらは、ことばを形容していることば、ことばについて記述していることばだ。

チンパンジーやゴリラがたくさんことばを覚えたといっても、彼らの語彙の中に、明らかにないことばがいくつかある。その一つが再帰性をもったことばなのだ。彼らが「形容詞」ということばを覚えた、と主張するような研究はない。

ことばに関することば、コミュニケーションに関するコミュニケーション、道具をつくる道具、そういうものはチンパンジーにない。これらは再帰的な関係にある。一段深いレベルのことを「メタ」という接頭辞で表現する。メタ言語といえば、言語に関する言語、メタコミュニケーションといえば、コミュニケーションに関するコミュニケーションのことだ。こういう視点でいうと、大型類人猿の言語習得や道具使用においては、階層性でノードの数に限りがあるだけでなく、再帰的な認識もない。

再帰的な認識、言い換えるとメタレベルの認識は、人間に固有だ。

そのことが、「他者の心を理解する」という社会的認知発達の話につながってくる。心というものを理解する心がチンパンジーにはない。少なくとも、あるという明確な証拠がない。再帰的な断層構造をもった認識がない。メタを冠するレベルの認識がない。

メタレベルの認識が「ない」ことを証明するのは原理的に不可能だ。もしかしたら、あるかもしれない。しかし、それをどうやって証明したらいいのか、今のところわからない。人間の場合にはメタレベルの認識を表す言語行動があるから、たしかに「ある」と言える。

### 他者の心を理解する心

メタレベルの認識を調べる実験の一つに、「誤信念課題」がある。次のようなシーンを被験者に見せる。いろいろな例があるが、平田聡さんの創案した「ピクニック編」である。

男の子と女の子がいます。

女の子はピクニックに行こうと思って、ジュースをかごに入れて部屋に入ってきました。

ジュースを冷やして持って行きたいと思ったので、冷蔵庫にジュースを入れて、かごを横へ置いて、その部屋を出ました。

次に、男の子がその部屋へやって来て、お腹がすいてたんでしょうね、冷蔵庫を開けたら、そのジュースが冷えている。「あ、このジュースおいしそうだな」と思って、ジュースを飲もうと思ったのだけれど、「あ、コップがないや」と思って部屋を出ました。

女の子がまた入ってきました。「あ、ジュースが十分冷えているな」「さあピクニックに行こう」ということで、ジュースをかごに移しました。そこで、服を着替えるために、またいったん部屋を出ました。

男の子がコップを持って帰ってきました。男の子はどっちへ行くでしょう。冷蔵庫へ行くかな？かごのほうへ行くかな？

このようなシーンを見せてから、「男の子はどっちへ行くでしょう」と聞くと、3歳までの人間の子は「かごのほうへ行く」と答える。「どうして？」と聞くと、「だって、ジュースはカゴの中にある」と言う。3歳までの子は、自分の見たものがすべて。ジュースは女の子がかごに移した、ジュースはかごの中にある、というわけだ。でも、4～5歳の子供になると、「コップをもった男の子は冷蔵庫へ行く」と答える。「だって、ジュースはそこにあつたと、その男の子は思っているから」。

この課題では、回答が非常にきれいに3歳までと、4～5歳からとに分かれる。自分が見ているものとは違う認識世界に他者がいるということがはっきり示されるのは、4～5歳になってからだ。

他者の心を理解する心というのは、先ほどのことばでいえば、自己埋め込み的な、再帰的な構造だ。心に関する心、認識に関する認識。それは非常に難しい。

このようなメタレベルの認識は、チンパンジーにとっては難しい。3歳までの人間の子供にとっても難しい（ただし、人間の3歳とチンパンジーが同じだという意味ではない）。

この課題で「どっちに行くでしょう」というのは言語を使って聞いている。それがチンパンジーにはできない。なんとかして誤信念課題をチンパンジーにもテストできる形に移そうと、いろいろな人がいろいろな試みをしていて、すでに論文になった研究もあるが、今のところ決定的なものはない。

出典：松沢哲郎『想像するちから チンパンジーが教えてくれた人間の心』103～106頁（岩波書店、2011年2月）

問1 筆者の言うチンパンジーと4～5歳の子供との違いは何か、を説明しなさい(50点)。

問2 人間に固有の「再帰的な認識」ないし「メタレベルの認識」が存在するために可能となる人間らしい活動があるとしたら、それはどのようなものがあるだろうか。具体的な例を挙げて、説明しなさい(50点)。

**問題2** 次の文章の表題は「情報社会の彼方」という。この文章を読んで、以下の問いに答えなさい(100点)。

### 暴露される情報社会の裏側

2007年に「ウィキリークス」というウェブサイトの存在が公表され、世界は騒然となりました。世界各国の学者や記者が匿名で投稿する120万以上の政治活動や企業活動や宗教活動についての機密文書を公開しているウェブサイトです。創設の中心はオーストラリアの記者でハッカーとしても活躍していたジュリアン・P・アサンジです。その活動には賛否両論ありますが、マスメディアや機密に直接関係のない一般庶民からは賛意が表明されているようです。その証拠に、雑誌『タイム』の2010年の「パーソン・オブ・ザ・イヤー」読者投票部門で1位になるほどの人気ですし、2008年にはイギリスの雑誌『エコノミスト』の「検閲指標」という表彰制度で受賞するなど、数多く表彰されています。

もっとも話題になったのは25万通のアメリカの公電が流失したことで、その一部は秘密文書や極秘文書であり、外交の裏側や本音の意見などが暴露されてしまい、アメリカはもちろん、文書を公開された人間にとっても大変な打撃でした。一例として、アメリカ大使館たちの「ベルルスコーニは無能で空虚」「ロシアは実際にマフィア国家」など外国への辛辣な言葉が公開され、アメリカ政府は「アメリカ政府へのサイバー攻撃」として全面戦争を宣言することになります。その影響もあり、紆余曲折はあるものの、アサンジは国際指名手配になり、反米国家エクアドルへの政治亡命を申請し、ロンドンのエクアドル大使館内に庇護され、2013年6月現在、大使館内で生活しています。スパイ映画のような状況です。

さらに同年5月にはスノーデン事件が発生しました。アメリカの中央情報局(CIA)や国家安全保障局(NSA)の仕事をしていたエドワード・スノーデンが、NSAの実行している個人情報収集の実態を暴露した事件です。スノーデンはハワイのオフィスで告発の根拠となる書類を自身のパーソナル・コンピュータに複写し、休暇を取得して香港に渡

航、そこでマスメディアにNSAが盗聴している実態と手口を公開し、自身に危害が波及すればすべての情報が流出すると発言しました。インターネットや電話の盗聴の現実が暴露されたことも衝撃ですが、その活動にマイクロソフト、ヤフー、グーグル、フェイスブック、ユーチューブ、スカイプ、アップルなどアメリカの主要な情報産業が協力していることが判明したことも衝撃でした。

アメリカ連邦捜査局（FBI）が情報漏洩など数十の容疑で捜査を開始したため、スノーデンは香港からロシアに移動します。モスクワの空港に約5週間滞在してから1年の滞在許可を取得し、2013年8月以後はロシアで生活しています。これもスパイ映画の様相です。

### 情報が漏洩する脆弱な情報社会

これらは一般国民には直接の影響がない問題ですが、2014年4月に多数の人々に被害をもたらす「ハートブリード（心臓出血）」問題が登場しました。情報をネットワークで送信する場合の暗号に欠陥があるという問題です。

重要な情報の送信には盗聴を防止するために暗号を使用しますが、世界のウェブサーバーの3分の2近くが採用している、だれでも自由に利用できる「オープンSSL」という暗号に問題が発覚したのです。身近な使用事例としては、インターネットで買物をするときにクレジットカードの番号を送信しますが、そのとき盗聴されないために数桁の数字を入力します。これがオープンSSLで暗号にするための符号です。オープンSSLは1998年に設立された数人の組織が開発し、現在も年間予算1億円弱、常勤は一人だけで大半はボランティアという弱小組織が維持しているソフトウェアで、そのボランティアの一人が意図せずにバグを組み込んでしまった結果です。至急、修正されたソフトウェアに交換する必要があり、利用していた企業は対応していますが、それでも50万台のウェブサーバーが攻撃に脆弱な状態にあり、パスワードなどが盗聴される危険があるといわれています。さらに、NSAはこの問題に相当以前から気付いていたが、外国からサイバー攻撃をしてくる端末装置の情報を収集するために秘匿していたという報道があり、情報社会の複雑な裏側も浮上しています。

これらの世界全体を震撼させる規模の問題に比較すると、些細な事件という印象になりそうですが、日本でもインターネットを経由した情報の窃取や特定のウェブサイトへの攻撃や内容の変更などの記事が連日のように報道されています。2014年4月に空港建物や鉄道駅舎の図面が日本グーグルの社員の失態により一般に公開されてしまう事件が発生しました。職員専用通路や保安関係部署などの位置が丸見えになってしまい、憂慮すべき事態になっています。最近では、個人情報漏洩する事件は頻発するため騒動にならない

ほどですが、2004年にはヤフーBBの登録会員450万人分の個人情報、2011年にはソニー・プレイステーションネットワークの2460万件の個人情報の流失などが発生しています。

ここまでの事例に共通する特徴は、問題となる行為が情報を窃盗し、情報を公開するというように、情報世界の内部で完結していることでした。しかし、そこを突破して物的世界に拡大した問題も発生しています。

### サイバー戦争時代の開始

2010年にイラン国内のウラン濃縮施設で甚大な被害が発生しました。ウランの濃縮は天然ウランを遠心分離装置で処理します。イランの施設には約8400台分の分離装置が設置されていましたが、回転速度が急激に増減し多数が故障してしまったのです。これは遠心分離装置の制御機器に「スタクスネット」と名付けられたコンピュータ・ウイルスが侵入し、勝手に回転速度を増加させたり減少させたりして遠心分離装置を故障させてしまった事件です。通信回線はインターネットに接続されていなかったのですが、スパイがウイルスを仕込んだUSBメモリーを内部に放置し、それを発見した人間が内部のコンピュータに挿入した瞬間にウイルスがネットワークに侵入したと推測されています。2012年にはサウジアラビアの石油会社やカタールの天然ガス会社の約3万台のコンピュータがウイルスに感染して使用できなくなりましたが、これはイランによる報復の一環だと推定されています。同年には、さらに強力な「フレーム」と名付けられたウイルスが発見されています。これがコンピュータに侵入すると、そのコンピュータが周囲のコンピュータやスマートフォンに指令を発信し、そこから攻撃をするという高度のウイルスです。これは工場のコンピュータの被害ですが、現代の社会では電力やガスなどのエネルギー施設、鉄道や航空などの交通施設もコンピュータで制御されています。それらが上記のように攻撃された場合には、被害は想像のできない規模になります。

さらなる脅威は軍事システムへの攻撃です。現代の最新兵器は戦闘機、爆撃機などの航空兵器も、潜水艦や駆逐艦などの海上兵器も、戦車や大砲などの陸上兵器も、すべて情報システムの支援がなければ役立ちません。事前の偵察なども情報システムを駆使していますが、戦闘が開始されれば情報システム相互の戦闘になります。これはサイバー戦争と命名されていますが、これが最大の激戦空間になるのが21世紀です。アメリカは陸上、海上と海中、空中に追加して、宇宙を第4の戦場と規定していましたが、現在では情報空間を第5の戦場とし、そこからの攻撃があれば、情報空間で対戦するだけでなく、第1から第4の空間からも攻撃すると明言しています。

人類が実現した第一の農業革命は森林や草原を田畑や牧場に転換するという環境破壊の

原因でした。第二の産業革命は鉱物資源や化石燃料を枯渇させるという資源破壊の原因であるとともに、大気温度を上昇させるという巨大な環境破壊の原因にもなっています。そして、第3の情報革命は人類が数万年かけて物質で構築してきた社会構造のみではなく、言葉、文字、絵画、音楽などの人間に特有のコミュニケーション能力が数十万年かけて構築してきた精神構造をも崩壊させるかもしれない事態に接近しているのです。

### 幸福国家ブータンの崩壊

これは長期の緩慢な変化のため、なかなか実感できませんが、その変化を数年に圧縮して実現してしまった社会が現代に存在します。その変化を展望することにより、人間社会の未来を展望します。

ヒマラヤ山脈南麓に位置するブータン王国は九州と同等の面積に70万人が生活する名高い幸福国家でした。2011年夏に筆者が訪問した時期には、その面影があり、山奥の農村は江戸時代以前の日本の農村を彷彿とする光景でした。国教であるチベット仏教を信仰する人々は仏壇の前面で毎朝礼拝し、所々にある経文を筆写したマニという名前の円筒を回転させて読経の代替とし、病気になっても医者に相談するよりは寺院の僧侶に相談するという生活をしています。

しかし、人口10万人に接近しつつある首都ティンプーでは、江戸末期から明治初期の東京都と同様に近代文明が急速に浸透し、周辺には集合住宅が次々と建設されている戦後の東京郊外を彷彿とさせる光景が展開していました。この極端な差異は徐々に出現したのではなく、1999年6月2日という特定の年月から急速に登場してきた現象です。先代のジグミ・シンゲ・ワンチュク国王の在位25周年を記念して、国王自身が発表した声明が契機でした。先代国王が「テレビジョンとインターネットという情報の道具を活用し、そのマイナスに翻弄されることのない国民の知恵と良識を信用する」と宣言し、2種の情報手段を解禁されたのです。さらに2003年には携帯電話も解禁されました。

先代国王は父君の客死により、急遽、弱冠16歳で国王となり、20歳の時に有名な「幸福国家宣言」を発表し、国体を立憲君主制国家に変更するなど、次々と大胆な改革を推進してこられた賢王ですが、仕上げとして情報革命を発令されたのです。その結果、テレビジョンで世界の生活を視聴した農村の若者が仕事の保証もなく首都に流入し、首都にはネットカフェやゲームセンターが登場し、携帯電話を片手にする人々が街路に氾濫するという変貌が発生しました。

江戸末期から明治初期に日本を訪問した外国人の多数が文明開化に奔走する様子を眼前にし、世界に唯一現存する極楽のような社会が崩壊していく悲劇を予言していますが、ブータンは約150年後に同様の道筋を行進しているようです。日本の記者がブータンの少

女に幸福の点数を質問したところ8点で、不足する2点は韓国に誕生しなかったことという回答でした。毎日、テレビジョンで放送される韓国ドラマの存在しない世界に幻惑されていることに気付かないのです。

### 希望を目指し情報を想像する人間の宿命

人類は古来、知識を獲得することの不幸を見抜いていました。「旧約聖書」に記述された楽園追放は一例です。労働の必要のない楽園に生活していたアダムとイヴは知識の果実を賞味した途端に楽園から追放されたのです。ギリシャ神話のオルフェウスとエウリディケの物語も同様です。死亡した愛妻エウリディケを奪還するために冥界に下降したオルフェウスは得意の竖琴で冥界を支配するハーデースを納得させ、エウリディケを奪還することに成功しそうになります。しかし、地上に帰還するまでは振り返ってはいけないというハーデースの命令に我慢できず、オルフェウスがあと一步で地上という地点で振り返ったため、エウリディケは再度冥界に落下してゆくという内容です。これは日本の神話に登場するイザナギとイザナミの物語に瓜二つです。

このような情報を獲得することの問題を警告したのが、イギリスの作家ジョージ・オーウェルが1949年に発表した小説『1984』です。物語は1950年代に発生した核戦争後の1984年、世界はオセアニア、ユーラシア、イースタシアの3超大国に分割されています。作品の舞台オセアニアでは、ビッグ・ブラザーと名付けられる独裁君主が君臨し、市民の行動はテレスクリーンという情報システムで監視され、思想、言語、結婚など生活のあらゆる側面が統制されている社会が構築されています。小説は社会の裏側を察知しはじめた主人公が逮捕され洗脳され、牢獄で処刑されることを想像している場面で終了しますが、巻末の作者不詳の解説「ニュースピークの原理」では支配体制が崩壊することが暗示されています。

原子爆弾とコンピュータが発明された直後に、そのような技術がもたらす未来を見通した作品は、ノルウェー・ブッククラブの「史上最高の文学100」に選定されるなど評価されているように、情報社会の到達するマイナスの方向を示唆する名作です。その1984年にコンピュータ会社アップルが「マッキントッシュ」という製品を発表します。リドリー・スコット監督によるコマーシャル・フィルムは『1984』を連想させる暗黒世界を、マッキントッシュを具現する女性がハンマーで打破する名作でした。しかし残念ながら、アップルは2012年10月にNSAに協力しはじめたことがスノーデンの情報によって暴露されました。事業が拡大していくなかで、創業したスティーヴ・ジョブスの理念は衰退していつているのです。

フランスの作家アルベール・カミュの小説の題名にもなっている「シジフォスの神話」



というギリシャ神話があります。シジフォスは岩石を裾野から山頂まで押し上げる業苦を命令されますが、あと一押しというところで、毎回、岩石は裾野まで落下するのです。

これは情報社会の運命とも重複する内容です。情報の価値を測定するエントロピーという概念があります。社会の全員が同一の情報を共有したときに数値は最大になりますが、それは情報の価値が最低になったことを意味します。そこで社会は停止し、再度、新規の情報を創造しなければ発展しないということです。岩石が裾野まで落下した状態から、再度、岩石を押し上げる努力をせざるをえないのが情報社会の宿命なのです。そのような宿命を情報は内包していることを古代から人類は察知し、民族の物語として伝承してきたことができます。

しかし、知識を獲得して楽園を追放され、情報社会というパンドラの小箱を開放してしまった人類は、小箱の片隅に残存した唯一の存在「希望」を目指しながら、情報社会を発展させていく宿命にあるのです。

出典：月尾嘉男『IT社会とコミュニケーション 過去・現在・未来』146～157頁  
(NNK出版、2014年7月)

(注) 原文にある図版やその指示などは略した。04年、08年などの西暦の略式表記は2004年、2008年に改めた。また、原文は改行が非常に多いので、それらをできるだけ意味のあるひとつの段落にまとめた。

問1 この文章で、筆者が言いたかったことはどのようなことか。その要旨を200字～300字以内にまとめなさい(50点)。

問2 テレビジョン、インターネット、携帯電話の3種の情報手段の解禁により、「幸福国家」ブータンの若者は幸福になったと考えるべきだろうか。それとも不幸になったと考えるべきだろうか。あなたの考えを自由に述べなさい(50点)。